

診療最前線

検診の現場から

意外と多い妊娠発情

現場ではさまざまな理由で人工授精データを訂正する必要が生じます。多くは前回授精で受胎している牛に誤って授精してしまった場合で、次の2つのケースで授精履歴との不一致が判明します。

- ① 子牛の出生時期、品種等の不審から実施した遺伝子検査結果との比較。
- ② 超音波画像診断装置を用いた妊娠鑑定による胎齢所見との比較。

授精データの誤りに気付かなかった場合、予期せぬ早期分娩による事故、乾乳時期のずれによる生産性の低下、乾乳軟膏残留、種雄牛相違といった問題が起り得ますし、購買牛であれば購買先からクレームを受けることもあります。

参考までに、八雲町の授精データ修正（削除）の履歴を基

に、平成20年1月～平成26年9月までの授精データ修正（削除）件数の推移を示します。



妊娠牛に授精してしまう主な原因として、まず妊娠発情が挙げられます。

妊娠発情とは、妊娠中にみられる発情で、裏発情、中間発情とも呼ばれます。通常は妊娠すると発情や排卵は停止しますが、まれに妊娠中であっても生じることがあります。大部分は妊娠初期に見られ、発情兆候は弱く持続時間は短いとされていますが、顕著な発情兆候を示し、正常発情と誤診することもあります。『獣医繁殖学 第4版』（文永堂出版）によれば、牛では妊娠3か月以内に発情兆候を示すものが約10%程度見られるとされています。AI（人工授精）、ET（受精卵移植）の後の牛が発情兆候を示した場合、本当に妊娠していないかしっかりと確認したうえで処置を行う必要があります。

妊娠牛に対する授精を防ぎ、修正件数を限りなく0件に近づ

ける必要がありますが、その対策として授精依頼牛の授精履歴・治療歴の再確認、畜主への稟告の徹底等の喚起、妊娠発情を意識した直腸検査、疑わしい時の膣鏡使用、空うちの励行、AI時の所見・違和感等の記録、個体・耳標の再確認等を行います。他にも、妊娠牛に授精してしまう原因としては、発情兆候の微弱化、カビ毒等の存在、授精履歴の確認不足、個体の取り違え等、さまざまなケースが考えられます。細心の注意と確認作業を心がけて授精業務を行っておりますが、畜主の皆様にも妊娠発情の存在をご理解いただき、繁殖台帳の管理徹底等についてご協力をお願いいたします。

（獣医師・岡野篤志）